

方剂名	効能	生薬組成
書籍	主治および証	病機 方意
<p>しぎやくさん 四逆散</p> <p>傷寒論</p>	<p>少陰病四逆（陽気阻遏・飲邪変生）・肝脾不和</p> <p><主治> 少陰病四逆（陽気阻遏・飲邪変性） 四肢の冷え、咳嗽、動悸、尿量減少、腹痛、下痢、裏急後重などを呈す。 肝脾不和 抑うつ感、ゆううつ感、いらいら、胸脇部が張って苦しい、腹満、腹痛、下痢、脈が弦などを呈す。</p> <p><病機> 陽気内鬱の病態である。 少陰病四逆（陽気阻遏・飲邪変性）は、風寒が外犯して少陰に深入したが、少陰陽気は衰弱しておらず、邪が厥陰（肝・心包）と少陽三焦に影響を及ぼした状態である。寒邪によって厥陰の陽熱の布達がはばまれ四肢抹消に達しないために四肢が冷える。少陽三焦の気機が阻滞されて津液が停積して飲邪が変性し、飲邪が肺を上犯すると咳嗽が、心を上凌すると動悸が生じ、水道を阻遏するので尿量減少する。寒邪が気機を阻遏すると腹痛、下痢が生じ、鬱阻された肝気が腸に下迫して、気機が渋滞するためにテネスマスを伴う。 肝脾不和は、内傷七情によって生じ、肝気が鬱結し情志が暢達しないために抑うつ感、ゆううつ感、いらいら、ヒステリックな反応などがあり、肝経の経気が阻滞されると胸脇部が張って痛む。肝気が鬱結し脾胃に横逆すると、脾気を阻滞して腹満、腹痛、下痢を引き起こし、胃気を阻滞すると胃痛、悪心、嘔吐などもみられる。弦脈は肝気鬱滞を示す。</p> <p><方意> 鬱阻された陽気を疏達通暢する。 少陰病四逆に対しては、柴胡で透邪疏鬱して気機を通暢にし、行気破滞の枳実がこれを補助する。白芍は和營、柔肝に、炙甘草は和中緩急に働き、共同して急迫を鎮め止痛する。柴胡の昇と枳実の降で気機の昇降を調え、炙甘草と白芍で気血を調え、陽気を調暢にして祛邪を強め、少陽、厥陰を通利する。 肝脾不和に対しては、疏肝解鬱の柴胡と、補血柔肝の白芍で肝気を条達させ、枳実で脾気の停滞を疏通すると共に柴胡の疏泄を補助し、炙甘草が諸薬を調和する。白芍と甘草は、酸甘化陰により肝陰を滋補し、柔肝を通じて柴胡の疏肝を助け、疏泄に伴う肝陰の消耗を防止し、さらに緩急止痛の芍薬甘草湯の意味を持つ。全体で、疏肝解鬱し肝の疏泄を暢調し脾運を高めて、肝脾を調和させる。</p> <p><参考> 加減法（病変が三焦に及んで多彩な症状が出る。それぞれに応じて対処する） 飲邪肺犯の咳に対しては、乾姜と五味子で温肺化飲、止咳する。 飲邪凌心で動悸がするときは、心陽を温通する桂枝を加える。 寒凝により水津が三焦に停留し小便不利をきたしているときは、淡滲利湿の茯苓を加える。 寒邪が脾絡を拘急させて腹痛が生じるときは、温陽散寒の附子を加える。 肝気が鬱阻され腸に下迫し泄利下重するときは、辛散通絡により気機を通じる薤白を加える。</p> <p>本方（四逆散）は「少陰病」に用いられるが、四逆湯などを用いる少陰（心・腎）の陽衰による四肢厥逆とは明らかに異なっている。本方の証は、陽気衰微の症候はみられず、寒邪による陽気阻遏が主体である。</p> <p>日本での保険適応効能、効果 比較的体力のあるもので、大柴胡湯証と小柴胡湯証との中間証を表わすものの次の諸症；胆のう炎、胆石症、胃炎、胃酸過多、胃潰瘍、鼻カタル、気管支炎、神経質、ヒステリー</p>	<p>柴胡・白芍・枳実・炙甘草各6g 水煎し服用する。</p>